

芸術資料館収集報告－平成の収集よもやま話

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大須賀, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000505

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



芸術資料館収集報告—平成の収集よもやま話

大須賀 潔

これは平成元年から平成17年3月に退職するまでの個人的な思い出もまじえた芸術資料館の収集報告である。その時期、芸大の収集史からみてもたくさんの作品や資料を収蔵できた誇るべきものであったと言える。新しい資料はそれぞれ違った理由や経過によってその都度収蔵品に加えられた。ここでは年を追って順に収集記録としてまとめているが、資料は偶然にではなくお互いが再び同じ場所に集まろうと呼び合った運命的なものに導かれたかのような個人的な感慨もある。例えば、制作者が先生と生徒、同級生とか師匠と弟子だったり、最初の発表が同じ展覧会だったような過去の関係理由があったりする。報告は美術作品や資料はそれぞれの在るべき終焉として館の収蔵品になるものと思えた不思議な物語でもある。

主要項目：購入と寄贈の収集

Museum collection report – Heisei period, its mysterious story

By Ohsuga Kiyoshi

This is a collecting report with my personal memories about our museum collection during the time from 1989 to 2006 while I have been working here. I can say it is a proud period in museum's collection history, so many art works and materials are collected in the days. Those new items have each own reason and different process nevertheless occasionally for gathering together into our museum collection. I describe it as a collection record in turn each year, and my curious impression that it may be not coincidental but belonging to a kind of fatality like that each items call each other to meet same place here again. In a case there are some kind relation reasons in the past like that, for example, works are by teacher and student or classmates, master and disciple, or the same exhibition its first exhibited. I believe art works and materials become museum collection as their own natural end, the mysterious story as below.

Key term; Paid and Donated collection

はじめに、収集方針など

収蔵品は現在でも卒業作品と参考作品との二つに区分けされている。それからして一般の美術館と違うけれども芸術系大学らしく不思議ではないが、最初にその質・量の豊かさには驚かされた。後に図案科の卒業作品のユニークさ、素晴らしさをも知ることになったが、参考作品のほとんど雑多な内容たるやそのまま博物館であり、宝物もあったが惜しむべくはまとまった形にはならないことだ。それらが世間にほとんど知られないまま保存されていたことにも驚く。発信する組織がないから仕方がなかったが。

さて作品の収集だが、購入予算の圧倒的な少なさには絶句する他はなかった。ゼロよりはましにしても、三桁に届かない予算、しかも国庫補助だというから京都市も大学事務局も作品収集がどんな意味を持つのかの認識が全くなかったことを示している。卒業作品だけの保存でいいという考え方もないではなかろうが、卒業作品があるなら作家として立ったその後の作品、先生の作品、関連するそれらの周囲の作家作品、と立体的に収集を組み立てれば、京都芸大の歴史と京都の文化を収蔵品で語ることができる。学内に向かっても学外に対してもそれは京都芸大の有るべき責務と思う。しかし収蔵庫も展示室もあるのに、付属図書館資料部門という外から見えない組織ではどうしようもなかった。その意味では平成3年4月に芸術資料館の看板を掲げることができたことが収集のためにも大きな効果をもたらすことになる。

作品購入は予算的に版画程度しか買えないという事情から、それまで版画の吉原英雄教授に一任していた。先生の顔ききによって良質な作品が収集され版画コレクションとして対外的に遜色のないものになっていた。しかし複数制作の版画を集めても芸大独自のコレクションを形成することは難しいという思いもあり、何より学内の先生に頼っている状況に問題がある。学芸員不在ならともかく二人いるのである。

まず購入と寄贈も含めた収集方針を新たに作った。京都芸大の歴史に沿った収集を形成していくこと、既存の収蔵品の性格、それをさらにどれだけ充実して特色あるものにできるか、が考え方の基本になる。そこから、活用可能な有形資料であることを前提にしてまとめたのが次のような方針だった。「1,本学の教員（旧教員を含む）及び卒業生による作品及び関連資料、2,既に収蔵しているコレクションをより充実させる作品及び関連資料、3,近代芸術の継承発展ないしは現代芸術の展開のうえで重要な役割を果たしている作家の作品及び関連資料」と定めた。購入については、少ない予算を最大限に活用するためには、「1,本学に係る作家の作品、草稿、スケッチ、2,絵画諸派の粉本・模本類、3,京都の美術工芸に関する資料」として始めていくことになった。ただし、運営委員会での合議承認などの組織的な手続きから、決定としては、平成9年11月だった。すぐさま方針を確定して動いたような記憶だったが、そうではなかったといま気がついている。

しかし実際上はそうした方針が生まれるべく実状を形成して収集活動は始まっていた。その実績からの実状を成文化して整理したというのが経過と思う。要するに、それらの収集は、制作された時代、国、及び種別を問わなくて、既存の収蔵品と関連づけられる性格であることが肝要なのであるから、内容的な質を問うのは当然の問題として何でも収集できることになるわけである。ただ購入できる作品には限界があり結果としては今日まで収集のほとんどが停年で

退職された先生方などの寄付に依るものであった。いくつかの収集を順を追って紹介していこうと思う。各年度の件数総点数には買い上げ卒業作品も含まれているが、周知のように買い上げについては図展委員会で決定された作品を受け入れているだけなので、それについてはふれない。それと記述上、敬称は省略する。

平成元年度、２年度

平成元年に、昭和48年３月まで本学油画教授だった独立美術の今井憲一の遺作の寄贈があった。京都精華大学と取り合いになった寄贈で必要な８点とスケッチを選んだ。この年は日展日本画の梶喜一（昭和２年絵専卒）、榊原紫峰「梅雨霽れ」の大作下絵、貴重なウィリアム・ブレイクのエッチング挿絵原本２冊などが収蔵された。原本とは、「NIGHT THOUGHTS（夜想）」（1917）と「THE GRAVE（墓場）」（1813）で、本学の教員だった長崎盛輝氏の旧蔵のものである。この入手には没後蔵書の整理にあたった潮江宏三教授の尽力が大きかった。

芸術資料館としての購入になる最初が平成２年度の予算だった。少ない予算では画廊など表玄関からの交渉は不可能に近いので、予算はこれだけしかありませんが何か分けてください、と芸大に縁の深い作家の遺族を訪ねていくしか方策はなく、通常取引されている値段を無視する裏口交渉にならざるを得ない。

最初にお願ひに行ったのが、日本画家福田平八郎のご遺族だった。美工・絵専を卒業して絵専教授もしてる文化勲章受章の人だけど美工の卒業作品だけしか収蔵されてなかったから、数千万もする作品の寄贈は無理でもせめて下絵か写生を入手したかった。大正期の写生２点がこの時で他に２点を寄贈いただいたが、初手は満足できるものではなかったのである。

また平成２年には濱田観（日本画・昭和11年絵専卒・日本芸術院会員）の代表作や石本正名誉教授の作品、特に在任中（昭和61年７月）に亡くなった創画会日本画の上原卓教授の遺作５点と写生167点の寄贈が生前に親しくお話を伺った思い出もあってうれしかった寄贈である。そして先の今井憲一とほぼ同時期に教鞭をとっていた津田周平の遺作が入り、停年退官された染色の来野月乙の作品寄贈もあり、作品だけでも17点が収蔵された。

平成３年は、近世の日本画家で京都府画学校で教えた今尾景年の資料を求めて、下鴨の今尾景祥さんを訪ねた。さすがに作品は残っていなかったが、もうお金は要らないからと４点の画稿類と５冊の写生帖を譲っていただいた時はうれしく感謝感謝であった。少ない予算で申し出るのだから、まるっきりひったくりのふんだくり、持っていきなさいと相手が言わざるを得ない状況になってしまう感じだったが、京都市立芸術大学の芸術資料館という博物館相当施設に永久保存して、学生や一般市民に見ていただいて活用する大儀名分があるから、厚かましくお願ひに参上できる。

美術館や博物館は、よく「箱・人・物」という言い方で比較される。箱は建物、人は学芸員や組織を支えるスタッフ、物は収蔵品である。この三つのレベルが高ければ運用次第で素晴らしい館活動ができる。本学の場合は、収蔵庫の増設を要求しながら独自の建物はいつの日かの将来にいつかは実現すると期待している。組織的にも運営の予算は貧弱過ぎるが最小限の活動ができるだけの素地は作られている。収蔵品も他にない歴史によって生み出された誇るべき数

量はある。ただかならずしもバランス良くまとまっているとは言い難いので、問題はそれを補っていかん質を向上させるかにある。それも少しだけ加えただけで各分野が数倍化するような内容のレベルにあるから何もない新設の施設に比較すれば優位は疑いようもない。修繕費も含め予算が潤沢であれば、その道は遠くなく早く到達できるが、作品の収集は予算があっても作品や資料との出会いがなければ獲得できない難しさがある。作品との出会いはそれを持っている人や扱う人との出会いでもあるが、また不思議なことに、仲間同志が声を掛け合って集まるのと同じように作品も作品を呼び寄せることを実際にしばしば経験した。それは作品が持っている運命を感じさせる不思議さである。

平成3年度、4年度

平成3年には、そういう人との繋がりがもたらしてくれた幸運があった。本学総務課にいた人が本庁に異動になって間もなく、倉庫に眠っている大きな掛け軸があるので見て欲しいと連絡してきた。芸大で仕事をしていた人だから、埃をかぶったままの何かが唯ならぬ美術品ではないかと気がつくことができた。当時館長だった榊原吉郎教授と三人で行ってみると、物は、絵専の校長も務めた西山翠璋と川村曼舟という日本画家が川北霞峰（美工教諭）と共作した松竹梅の三幅対と曼舟の帝展出品の大作掛け軸であった。昭和の初めに京都市長に使って下さいと寄贈した作品と思われた。三人は京都の日本画壇では先の今尾景年の後輩たち、直接の弟子ではないが薫陶を受けた人たちになる。探しても見つからない、あっても買うにも買えない貴重な作品は、こうして人との繋がりにから京都市美術館ではなく芸術資料館へと保管転換され収蔵品となった。

この年は他にも富本憲吉が収集して愛玩していたという伊万里焼など江戸期の陶磁器6点、定年退官した日本画の木下章、陶磁器の鈴木治の作品が収蔵され、購入では入江波光の遺族、日展日本画の入江酉一郎さんをお願いして、収蔵されている卒業作品の名作「春雨」と「北野の裏の梅」の画稿、それに加えて本画が焼失している国画創作協会展の出品作「虹」の画稿の3点を収蔵できたので、ようやく収集方針に格好をつけることができた。

平成4年度は、戦後から本学で永く指導にあたっていた創画会、その前身の創造美術からの結成会員だった奥村厚一の遺族を訪ねた。絵専の卒業生である奥村厚一も昭和45年まで20年間本学で教えてきた人だが、退任の時に寄贈された作品が1点あるきりだった。奥さんがまだご存命で写生資料をお願いにいったのである。資料を調査するうちに折りたたまれたままの画稿類に出会った。帝展や新文展の出品作品と同寸の見応えのある文句なしの資料だった。写生の33点は寄贈を受けることにして、残されていた出品作の画稿10点を購入させていただくことが出来たのは大きな収穫だった。画稿はさながら木炭写生の大作そのままで新収蔵品展で一度しか公開できていないのが勿体ないが、裏打ちをし一部は額装にもして保存している。同じ年には、奥村厚一と絵専で同時期に学び、全く同時期に本学で指導にあたっていた林司馬の仏画模写の寄贈もご遺族からあったのである。この時は林司馬の話が先で縁が深いとも何にも思わずに少しは面識があつてお願いし易い奥村家を訪ねたのだったが、貴重な画稿類にたどり着かせてくれたのは、この二人の交流の何かが引き寄せてくれたのかかもしれないと思っている。同じ

年、絵専で二人のすぐ後輩の日本画家後藤貞之介の画稿や写生資料が収蔵され、林司馬と競りあった河津光俊の模写2点が寄贈されたのもまた何かの巡り合わせがあったのだろうか。他にこの年は定年退官された油画の真野岩夫、漆の冬木偉紗夫の作品、デザインの稲田尚之の資料が入っているし、京都市美術館に眠ったままだった明・清の中国絵画2点を移管して収蔵品としている。これは美術館の表に出ない内情を知っているから出来たことだが、中国絵画が2点だけあっても美術館では活用のしようがないし、中国の資料は芸大の方が多から理に適っているし自然な流れという気がする。

平成5年度

平成5年度の購入は、太田喜二郎の「山城平野の夕日」だった。太田喜二郎は大正6年8月から昭和24年7月まで本学で教えていた洋画家で印象派の受容から穏やかな写実表現へ移行した人である。購入作品は昭和20年作で画家自身が刊行した作品集の口絵としてカラー図版で掲載されているものだが、これが当時はまだ玄人になりきらない古美術商から入手できたのは偶然の幸運だった。2年程前からよく分からないからと問い合わせがあつて資料を見に行つてから知り合うようになった若いご夫婦である。送ってきた販売カタログに個人的に興味があり値頃なスケッチがあつたので出かけてみた。行ってみると間に合わなかつたのでカタログには載せてないが、太田喜二郎という人の作品が入つたばかりですという。即決だった。京都市美術館には代表作がいくつかあるが芸大には教員なのに1点もなかつた。著名な画家ではないにしても文展や帝展で活躍した人だし、出るところに出てしまえば、こっちの予算では手が届かない。今から思えば、古美術商の主人も太田喜二郎の評価をしっかりと知っていたわけではなかつたようで、仕入れも安かつた様子だったから、もっと利口に安値で交渉できたかもしれないとちらつとと思っている。しかしこれも自分の物を買に行つたのに、予期しない作品とのうれしい出会いの思い出になった。その上、その古美術商は現在では寺町の古美術街に立派な店を構えてかなりの商売を続けるようになったから、もう予算の少ない当館など相手にもしてくれないようになったのである。

この年は定年退職された構想設計の関根勢之助から「砂漠記」や「絵画時間」など収蔵品には数少ない現代美術の作品4点を寄贈いただいた。それから竹内栖鳳門下の日本画家千種掃雲の画稿や写生帖77点、大正8年絵専卒で国展で活躍した伊藤柏台の写生資料21点の寄贈などもあつた。

平成6年度

写生帖や画稿類の収集は平成6年度にも続いた。美工教諭だった日本画家川北霞峰の写生資料96点が購入され、さらには大正13年に絵専を卒業し後には日本芸術院会員にもなった日本画の三輪晃勢の写生と画稿67点、出品作下絵2点、などの寄贈もあつた。前者は明治20年代、後者は昭和初めから10年代と制作年がはっきりしてる資料なので整理上も有り難かつたし、晃勢さんの資料の中で帝展初入選作「東山」の下絵は本画の行方が判らないものだし、「波切写生」画卷は後からの調査で美工の卒業制作になったものとも判明した。購入では予算が残つたので、

絵専の卒業で後に日本芸術院会員・文化勲章受章者となった日本画の徳岡神泉の美工時代の写生を1点入手することにまわせたのも有り難い。この時の入手には苦労の思い出は後で述べよう。加えてこの年は退任された教授も多く、模写の岩井弘、洋画の森本岩雄、彫刻の山崎脩、染色の西嶋武司、デザインの平田自一から総数42点が寄贈された。作家にお願いして中村善種の洋画、京都造形芸術大学を退任する機会にと渡辺武蔵の日本画を寄贈いただいたのもこの年だったから、新たに収蔵品として登録されたのは優に200点を超えたのである。

平成7年度も収集の目玉に挙げたい作品はいくつかあった。中でも思い出深いのはやはり徳岡神泉の「自画像」である。神泉の主要な作品のほとんどは東京と京都の近代美術館にまわっている。本学には美工の卒業制作と入選しなかったが文展に出品した「晩秋」があった。この大作が裏打ちなしで屏風から額装されて数カ所穴が空いたままの状態だったのを、本学に異動した時に見てびっくりしたものだ。早速に補修して展示できるようにして、それからしばしば回顧展にも出品されるようになった。その後もなんとか新たな神泉の資料を収蔵できないものかと考えていたから、名古屋市美術館で回顧展があった平成4年6月の招待日にご遺族に会うために出かけて行った。その頃はお元気だった山岸純教授は神泉に師事してご遺族とは懇意にされていたから紹介していただき交渉が始まっていくのだが、出張旅費はゼロだったから東京の自宅に伺う機会はなかなか作れない。自費で何度か通ったりした。根負けしたのだと思うが、ついには手元の写生資料を分けて頂けることになったのが、現在収蔵している「牡丹(落花)」などの写生であるが、要は3年がかりだった。この間、かなり気心が知れるようになった(と勝手に思っているが)頃、画室の隅にあったものですがと巻かれたままの着彩の人物画、10号ほどの、を見せてくれた。鏡を見ながら自分を描く自画像特有の眼がそこにあった。自画像に関心があったたくさんの作品を見てきたから、まぎれもない神泉の自画像、それも制作に迷いがあった大正期中頃のものだと判断した。日本画で自画像は余り描かれない画題だが、神泉のような思索的な資質の人や若い時期には作例はある。ただ内面の屈折した想いもあって描いた本人も普通発表は考えない。神泉の自画像も表装もない巻いた状態だから傷みもある。躊躇しているご遺族を、とにかく保存のため修理して額装にして出来上がりを見てもらってから判断しますからと強引に説き伏せて預かって帰ったのである。そして額装して再び運んで改めて寄贈をお願いした(収蔵品扱いで予算を使ってしまうから、そうならないと困る)のである。学内での展示の後、平成8年4月に京都国立近代美術館での徳岡神泉展が初めての学外公開となったが、この時は無理にお願いして参考資料としての展示だった。作品の性格上そうなるのは仕方ないが、日本画家の自画像として貴重な作品として残っていくものである。

この年の購入も目玉と言っておかしくないものに出会えた。明治日本画の異才岸竹堂の「橋立・近江八景図巻」である。これは京都の老舗の古美術商の売り立て目録に載っていた作品だったが、付けてある値はとくに予算を越えていた。とにかく勉強のため見せて欲しいと学芸員二人揃って出かけた。これは卷子であったせいか、他所から引き合いがなかったのが幸いした。竹堂の近江八景なら滋賀県立近代美術館が触手を動かしても不思議ではなかったが、そのへんは尋ね損ねている。予算を言って無理にお願いして、結局は半ば寄付のような形で譲ってもらった。さすが京都の老舗の古美術商である、懐が深く余裕があり、金銭的な実よりも品物

を納める先の名を取る矜持を感じた。それが作品のためにいいことであるなら、利益を二の次にする。美術を生業とする者なら、そういう心意気は見習うべきと勉強になった。

平成7年度

平成7年度の新収蔵品にはまた版画もいい収集が出来た。木版で知られた京都の浅野竹二の作品が幅広い制作時期にわたって17点が昔からの知り合いの仲介で寄贈されたし、退任する版画の吉原英雄から最新作を含め7点を残していただけたのである。同じく退任の日本画の山岸純3点、陶磁器の小山喜平から6点をいただいた。他にも川村曼舟旧蔵の幕末明治の日本画や墨跡資料42点、卒業生の染色屏風や彫刻3点が新たに加わったし、珍しいところでは、京都市の保養施設に保管されていた旧教員で日本画家の三宅呉暁の掛け軸を調査した機会に、お願いして保管転換の手続きで新収蔵品にできたのも収穫だった。

平成8年度もまた面白い事件から貴重な作品が収集できた年だった。夏前だったと思うが、京都市美術館にいた頃に一緒だった職員から突然電話が入った。何やら興奮気味で地下の倉庫からどれくらいものが出てきたからすぐに飛んで来いというのである。旧知のその職員は美術館から上京区役所に異動していた人だったが、掃除やら整理をされていて色々が見つけたらしい。また何を騒いでるのやろと性情を心得ている身としてはさして期待もせずに出かけていったのだったが、埃だらけで杉板作りの六尺三尺の大長持ちの中から和額になった絵が10点ばかり出てきたのである。それも望月玉泉、鈴木松年、菊池芳文、都路華香、神坂雪佳、山元春挙、という本学に縁の深い京都日本画の代表選手の作品ばかりだったから、さすがにびっくりしないわけにはいかなかった。その中には三宅呉暁の作品もあったから、前年に収蔵した呉暁の作品が、それなら同じ京都市の他の処にもあるよ、と呼んだのかもしれないと思ったほどである。加えて明治期京都洋画の伊藤快彦の杉板油絵もあったから、上京区役所がそれをすっかり忘れてしまっていたにせよ、新たな大発見には違いなかった。ただそんな状況だったから残されていた作品は保管されていただけのことで、制作年も原題も不明のままで損傷も大きかった。それらは上京区が新たに分区独立したお祝いに寄付された美術品と思われたが、何故それらがあるのか詳細な経緯については書類などいっさい残されていなかった。調査を終えて、さあどう処置するかが問題だった。それだけの美術品を区役所としても簡単には手放せない。区長も、右から左へハイどうぞともすんなり言えなかったのではないか。ここで昔の同僚が潜在的な影響力を発揮してくれたと思っている。美術館にいたから美術品が本来どう有るべきかは知っている。それをしかも美術館へと話を流さずに本学に導いてくれたのは、酒を一緒に飲んで酔って喧嘩もした程の深い付き合いの彼の尽力だった。本学に保管転換するその代償に、他にも発見された染織資料の区役所での活用を図るなどの約束でなんとか収蔵品に加えることが出来た経過となったのである。それもこれも人と人、作品が作品を呼び寄せる不思議な縁と感謝している。

その中での特記すべき収穫は、神坂雪佳の「観楓図」と伊藤快彦の「能道具図」である。神坂雪佳は琳派を継承した絵画と近代の工芸図案の双方で明治大正の京都美術界に大きく貢献し、美工で指導にもあたっていたから、本学に縁の深い人である。本学には図案の卷子2巻が

保存されてきた。しかし新しい関連資料の収集は予算があってもほとんど不可能に近い状況だった。そこへどこに出しても遜色ない雪佳らしい琳派風の絵画作品が入ったのである。そして事件がすっかり落ち着いた頃、平成15年8月に京都国立近代美術館で画期的な神坂雪佳展が開催され、元々アメリカでの評価が高かったからアメリカの二カ所へも巡回した。「観楓図」の作品が堂々そこに展示されたのは言うまでもなく、本学芸術資料館として図案資料も絵画もあるよと面目を保つことができたこと安堵したことだった。

またこの年も退任される中井貞次の2曲5双染色屏風など3点、高井一郎が昭和56年にデザインした近年は大はやりの小輪自転車の寄贈もあった。他に本学卒業でパンリアル美術協会の中心メンバーの一人として活躍した下村良之介の下絵や写生資料、本学と直接の関係はないが、戦前のシュールレアリスム絵画で評価が高い京都洋画の小牧源太郎の作品10点も寄贈された年だった。さらにこの年に入った林屋源之助（担養）の作品は、京都市美術館で仕事をしていた頃、登録もされず宙に浮いたまま書庫の隅にあったものだった。恐らく戦前の市展の搬出忘れが連絡先不明でそのままになったと思われるが、題名と作者は裏にあって記憶に残っていた。芸大に移って卒業生名簿を何度も見るようになり、絵専の卒業生ということに気がついて、それならと身元引き受け人よろしく宙ぶらりんの状態の美術館から本学の収蔵庫で安眠できるようにしたのである。

平成8年度、9年度

平成8年度は購入作品探しに苦労した年であった。結局はピンからキリまで珍しいものを見つけ出してくる懇意の古美術商を訪ねて、画学校の教員でもあり跡見学園の創立者の跡見花蹊の従妹になる跡見玉枝、同じく画学校教員だった浅井柳塘の作品、幸野煤嶺の東本願寺障壁画の画稿という本学に似つかわしい良質な資料を収蔵することが出来た。少しだけの購入でも、従来からの収蔵品の基礎が充実しているから、それを豊かにする効果率は極めて高いと思う。またこの年から版画教室卒業生制作の小品集「ポートフォリオ」が寄贈されるようになり、ずっと継続されることによってひとつのユニークな収集を形成していく。

平成9年度も寄贈によって大きな収穫を得た年だった。本学の染織に縁の深い小合友之助の貴重な作品と資料をご遺族から寄贈いただいたのである（実際の搬入は平成8年夏の前で整理から登録まで一年以上を要した）。小合友之助は、本学染織教育の基礎を作った重要な一人である。本学の工芸科は昭和20年4月に絵専が京都市立美術専門学校と改称され、同22年4月に設置された工芸科（図案部・漆工部）に始まるが、美専は翌年すぐに新制大学への昇格が決定され、同25年4月に京都市立美術大学となる。この時の工芸科四専攻に図案とは別に染織図案専攻が誕生している。小合友之助は、その半年前に着任しその準備に尽力し4月に着任した稲垣稔次郎と共に昭和38年に退任するまで指導にあたった。現在活躍している作家のほとんどが二人の薫陶を受け、現在の若い世代も含め系統的には全てが二人につながる形である。小合友之助自身は日展の会員で終わったが作家としての評価にはそれを越えるところがあるのは、開催される回顧展の回数でもうかがえる。

ご遺族からの寄贈には本学染色教員たちの側面援助もあったことだったが、とにかく整理

は後からのこととして搬入した作品や墨彩画、写生帖やノート、模写、愛蔵していた作品に至るまで資料は膨大だったから整理もまた大変だった。整理も大変だったが収穫もまたすごいものだった。その一つは、小合友之助がまだ絵の道に進むか染色に行くか心を決めていなかった（と思われる）若い時の古裂模写である。大正5年くらいから昭和初めまで10年続けた模写から糸と染めと意匠の美を学んだから、まだ染色家という作家的認識の希薄だった時に絵画ではなく染色家へと決意させた仕事でもあった。小合友之助にとっても模写としても染織資料としても貴重な模写は61枚（81図）あってほとんど世に知られてこなかったものである。それと帝展に初入選した壁掛けなど初期の制作が8点あった。これも今まで展覧されなかったもので作家の初期の仕事を知る貴重な作品であった。総数で619点を数える小合友之助関連の新たな収蔵の意義には計り知れないものがある。その詳細は芸術資料館年報の第7号にまとめているので、ここではこれ以上ふれないが、そうした未知の資料に出会いそれを整理して新しい評価への道筋を見つけることができるというのは、まさに学芸員冥利につくというものである。その一部、78点を平成9年10月に京都市四条ギャラリーで初公開もした。

この年はまた知られざる名品の発掘で名高い京都の星野画廊から珍しい絵画資料の寄贈を受けることが出来た。絵専卒業の岡本神草、清水朱敬の画稿や写生である。神草は卒業制作の「口紅」が展覧会や美術雑誌でよく紹介されるので知名度は高いが、夭逝しているので作品がほとんどない。未完や画稿でも貴重なのである。驚いたのは、その中に九州と裏書きされたクジャクの花鳥図画稿があったことである。「九州」は福田平八郎が絵専を卒業するまでに用いていた雅号であり、二人は同じ大正7年卒業の同級生である。同級生同志がお互いの写生や画稿を所持することは過去の資料調査でもしばしばあったことでおかしなことではないから、これは平八郎が学校時代、恐らく大正4年か5年（二人がそこまで親しくなるのに時間を要したとすれば5年）に制作した作品の画稿にまちがいがなかった。これも知られざる資料の発掘であった。

画稿と言えば、中村大三郎の大正8年の卒業制作「花を持てる聖者」と7年の文展出品画の画稿もご遺族から寄贈されたのもこの年である。大三郎は先の二人より一年後の卒業生になる。当然、同じ空気を吸って学校にいたのには違いなく、相前後してのこの寄贈にも何か作品の魂が呼び合うかのような印象を持つのである。またこの年度で退任した漆工の藤崎誠の作品の寄贈もあり、一緒に愛蔵していた陶芸家藤本能道（昭和31年から37年7月まで本学で教えていた）の色絵になる前の芸大時代の作品もご寄付いただいたこともうれしかった。

この年の購入も結局は再び京都の老舗の温情に甘えた形になった。都路華香の六曲一双「神苑図」屏風だった。都路華香の作品は先の小合友之助も初めは師事して日本画を学んでいたこともあって、掛け軸が二つあった。屏風に出会う水先案内人になってくれたのかもしれない。平成18年に京都国立近代美術館で初めての本格的な回顧展に堂々と出品されて、この時にも芸大としての面目を果たせたのだった。

平成10年度、11年度

平成10年度は一休みした年度になったかもしれない。星野空外の天津絵や挿絵原画などの資

料200点余りを購入に充てたから関連資料は一層充実できた。寄贈は早川良雄と田中一光のポスター資料がそれぞれからまとめてあった。田中は美専の卒業生、同じようにビジュアルデザインで活躍してる早川は卒業生ではないが一回り後輩、美大で教えたことがある。同じ年の寄贈になったのは全くの偶然である。退任での寄贈は音楽学部の先生から田能村直入の掛け軸2点を寄贈があったのも異例と言える。直入さんの関連資料はその後もぼつりぼつりとあったりで今では芸大らしい質と量になっている。しかしこの年も登録点数は259点を数える。

平成11年度は洋画で目だった寄贈を受けた。一つは昭和41年から11年間本学で教えていた独立美術協会の安田謙の資料である。京都市美術館で遺作展があり教えを受けた卒業生が会員になったりもしてるから話が生まれる。出品制作から自画像、写生帖、画稿まで25点の十分な資料が揃った。もう一つは二紀会の金田辰弘。芸大と直接の関連はないが安田謙と同時代に京都で活躍した作家ということでの収蔵である。それと奇特な収集家から内外著名作家の版画や日本の陶磁器コレクションの寄贈申し出を受けた。個人の趣味で集めた小品ばかりだったから、美術館などでは受け入れは難しい内容であり懸念もあったから調査に出かけた。ピカソやシャガール、ミロ、長谷川潔、棟方志功など名前がある。こうした収集も個人コレクションという形なら参考資料で収蔵できるし、価格評価すれば相応な金額であり、ユニークな収蔵にもなるからと相談して受け入れた。それと展覧会があった契機に寄贈をお願いしたのは、染色の皆川泰蔵だった。昭和10年に美工を卒業している日展の作家である。若い頃と後年の作品と2点を有り難く収蔵した。同じ年に洛北の修道院を題材にした小合友之助の染色屏風が新たに1点入った。また昭和23年美専卒でパンリアル展で活躍した野村耕の現代美術と美工の卒業制作や写生の寄贈もこの年にあった。

退任記念の寄贈では、図書・資料館の館長も務めた榊原吉郎が自分の父の作品だからとわざわざ画廊から買い受けて寄贈していただいた作品がある。明治45年絵専第二回卒業生の榊原苔山の四曲半双屏風、帝展出品の秀作だった。苔山は榊原家の絵専卒日本画四兄弟の三男である。著名なのは国画創作協会結成の一人で絵専・美専・美大と35年近く本学で指導にあたった次男の紫峰であり世に残る作品も多い。長男の雨村、四男の始更もそれぞれ活躍しているが残された作品が少ないから、苔山の屏風は京都国立近代美術館も欲しがっていた程に貴重な作品だった。また屏風と一緒に家にあった苔山旧蔵の粉本類の山をご寄贈いただいた。整理してみると千枚を越える写生画稿のうちには、紫峰の細密な昆虫写生があったし、雨村の卒業制作の元になった写生も含まれていたりして、これも他では入手出来ない貴重な資料だった。このおかげでこの年は1294点と登録数もはねあがったのである。

この年の購入も思い出の一つになった。昭和11年絵専卒で後に日本芸術院会員にもなった日本画の西山英雄のご遺族を訪ねた。美術館時代にはお酒のお世話にもなった思い出もある人なのだが、遺作展の後で家に残った遺作を美術館に寄贈いただいたがその頃は芸大へは気がつかなかったから異動で来てみて卒業制作しかないのは残念に思うようになっていたから、せめて写生だけでもと訪ねていった。幸い写生はまだ相当数があったが、正規の売買なら予算では10枚も買えない。画稿が一枚だけ残っていた。本画がオーストラリアの日本大使館に行ってしまった

っている「エアーズ・ロック」だった。日本では見るできない作品の画稿を購入とし、写生は20枚を選びだして寄贈の形にした。そうすればご遺族（実際はよく知っている一番弟子の日展作家にお世話してもらうことが出来たのだが）にしても滅茶安売りしたことにはならないから体面が保てるのである。芸大らしい収集が出来てまた感謝感謝であった。

平成12年度

平成12年度の新たな収蔵は730点という数になった。これは日本画家猪原大華の写生や粉本類の資料、遺されていた画家の生涯にわたるほぼ全てをご遺族から寄贈を受けたものを500点とした数字である。未だに整理を終えていないので追加登録はさらに増えるはずの数字なのだが、他に購入で幕末明治の日本画家鈴木百年の資料の出物があり大小59点も加わる。同じ年に鈴木松年の直系のご遺族から百年や松年などの本画を9点受け入れたから、画学校時代の教員で明治の京都で力があつた松年関係のいわゆる鈴木派の絵画資料は縁の深い本学として他に遜色のない収集を形成できたことになる。そこに松年や百年の代表作的な大作を加えることが出来たらもう立派なものだがいずれ自ずとそういう機会も訪れることだろう。

またこの年の数の多さは、平成12年5月に京都市美術館において創立120周年を記念する展覧会を大々的に開催したことにも理由がある。展覧会は本学が京都市立美術大学となってちょうど50年にもあたることから、美大時代から現在の教員まで、美術科・工芸科・デザイン科の3科11専攻を網羅した内容だった。一作家1点で155作家に及ぶ展覧会史上例のない企画であった。その実務を芸術資料館が担当したから開催までの一年半ほどは大変な仕事量だった。展覧会終了後に出品各作家に可能な範囲で寄贈をお願いしたのである。そして上村淳之の日本画や元永定正、西岡義一の洋画、宮下善爾、森野泰明の陶器、デザインや映像作品など49件65点、様々なジャンルの作品が一気に収蔵された。作家の中からは学長名による寄贈のお願いもなしでは失礼ではないか、というお叱りの声もあり反省しなければいけないが、学内では評議会や学長への報告は勿論している。ともかくも記念展がらみのドタバタ収集の思い出の年ではあった。この記念展の準備や開催、返却、後始末、完了するまでの楽しくもあり苦くもある思い出は数々あるがそれは別の機会にしなければならない。

その次のまとまった数量は、大正14年に美工の図案科を卒業して戦後はテキスタイル・デザインの分野で活躍した西村進のデザイン資料46点である。時代のファッションを示すプリント生地や衣裳、シルクスクリーン版画などであった。こうしたデザインの現物資料の収集は簡単にできるものではなく、この経緯も人から人へのつながりがもたらした珍しい縁からの寄贈だったが運命的な必然さえ感じさせられる人から人へのつながり方には違いなかった。

この年度の退任記念の寄贈は油画の大串佐知子、染色の中野光雄の二人から3点ずつ戴いた。日本画の名誉教授山岸純からも改めて比較的早い時期の作品から近作の日展出品作や展示し易い50号程度の作品など12点を受け入れ登録した。濱田観の鯉、濱田昇児の特選作などの寄贈があったのもこの年だった。濱田観は昭和11年に絵専を卒業して日展で活躍、後には日本芸術院会員にもなった人で平成2年度寄贈の「芥子」もあるから釣り合いがとれる。濱田昇児も昭和24年美専卒で日展日本画で活躍している人である。親子の卒業年を比較すれば、画業の始まり

は遅いけれども、濱田観がいかに実力があって評価を高めていったかが判る。この年は日展日本画だけでなく創画会の日本画も寄贈があった。昭和20年絵専卒で創画会会員の橋田二郎からも現代花鳥画を5点寄贈していただいた。購入で先の鈴木百年絵画資料とパンリアル美術協会の結成に参加して活躍した下村良之介の自画像作品と軍鶏の画稿を補充しているから、日本画だけでも間口を広げている感じである。あれやこれ、実に多彩なと自負できる平成12年度730点の内容である。

平成13年度

平成13年度も登録した点数は139点になるが、この年は総じて退任教授たちに頼った収集になった。日本画の岩倉寿、油画の山添耕治、陶磁器の甲本章人、佐藤敏、版画の舞原克典デザインの田坪良次の6人がいっせいに退任された年で、岩倉寿は日展出品作の日本画7点、山添耕治はフレスコストラッポによる大作とテムペラ油彩模写の2点、甲本章人が3点の壺、佐藤敏が近作の様々な仕事6点、舞原克典は版画6点に加えて若い時期の油彩やデッサン、鉛筆画など13点を大学に残していただいた。うれしかったのは、舞原克典が卒業した教え子たちの個展などでその都度買い求めた収集を寄贈してくれたことだった。退任記念展ではそれらも一緒に並べて版画教室への暖かな情を感じさせてくれたのだったが、総数80点にもなる。その中には赤瀬川源平や麻田浩など卒業生ではない作家の作品もあり芸術資料館の版画コレクションに本学にふさわしい収集の実りをもたらしてくれたのである。それと岩倉寿からやはり愛蔵していた須田国太郎の裸婦素描が寄贈された。大正7年のもので、京都大学の大学院学生だった須田国太郎が関西美術院に通ってデッサンを学んでいた時の珍しい素描である。それと田坪良次から小品ではあるが富本憲吉の作品「色絵粟田香炉」が寄贈していただいた。富本憲吉は昭和25年から38年まで美大で教え最後は学長も務めた人間国宝の人だが、本学には未完成の最晩年作と小品しかなかったから貴重だった。後から思えばこれが呼び水となったのか、大切な次の収集への出会いになったと思っている。

この年の購入は、芸術資料館が所蔵している山口華楊「樹」の画稿と小下図であった。山口華楊は大正8年絵専卒業で日展日本画で活躍、戦後の画塾晨鳥社を主宰し日本芸術院会員にもなった人、現在は白梅町に記念館もありご遺族が遺作を大切に保存しているので交渉は難しかった。遺族が関係している或る会に友人の紹介で参加するようになり、そこで知己を得てからの交渉、それでも了解をとりつけるまでには足かけ3年を要した購入ではあった。

平成14年度

平成14年度の登録数は51件834点である。この年の大きな収集は川端弥之助の遺作24点とスケッチブックなど343点だろう。ご遺族とは美術館時代から展覧会でお世話になって知っていた。川端弥之助は、昭和24年から38年まで美専・美大で教えていた春陽会の洋画家である。背の高い温厚な人柄で西洋文化の味付けをした京都の文化の良さが血肉となって身体に溶けこんでいるような印象だった。日本の洋画界で著名とか活躍とかの次元ではなく絵を描き続け尊敬を集めていた人である。それまでは一点しか所蔵していなかったから、何とかならないかと思

っていた矢先に連絡があってお訪ねした。幸いかなりの数が残っていて、もう一つ縁の美術系大学へも寄贈したいとのことで、一足先にめばしい作品を確保してスケッチブックや日記帖など資料類は全部寄贈していただいたのである。さらには、この寄贈をきっかけにほぼ同時期に美大で教えていた洋画家高林和作のご遺族にも声をかけてくれたので、後年その関係資料も収蔵することができるようになったこともあり大変に有り難かった。

退任記念では染織の中村彦之のタピスリーなど7点がある。少し前に退任された日本画の木下章から花の素描78点、デザインの平田自一から得難い上野リチのデザイン資料19点の寄贈を受けたのもこの年だった。珍しい寄贈では知人からの紹介で実現した日本画家たちの書簡類の寄贈がある。前述の星野空外の調査から探りあてていた、大正期に栄えた南紀の豪商の家に伝わったもので、豪商が家に招いて逗留させた土田麦僊、小野竹喬、村上華岳、榊原紫峰といった国画創作協会の人たちや星野空外、巖谷小波、河上肇まで20数人の書簡347点である。文字通り未公開、新発見の貴重な資料であり、内容的に全部を読み切るところまで調査は進んでいないが、これによって画家と援助者と時代との知られざる交流が明らかにもできる。関心のある人には研究してほしいところである。加えて星野空外の仏画掛け軸1点も寄贈いただき空外への理解も深まる一助となるだろう。

この年の購入が富本憲吉が大正15年に制作した染付陶板「曲る道」だった。年が明けて年度末近くなっても何を購入するか全く方針が立たない年度だった。土曜日の画廊まわりの帰途情報収集でもなく知り合いの画廊に立ち寄る。ほっこり煙草を吸って一隅を見れば、富本憲吉と横面に走り書きしてある薄汚れた間に合わせのダンボール箱があった。えっと思い中を見せてもらう。数日前に持ち込みがあったというのが半信半疑にならざるを得ない。似たような品物は見たことはないが、曲る道や竹林月夜などは富本憲吉にはよく使われる意匠だったから見覚えは確かだった。値を聞くと予算内であった。きっと富本をよく知らないのだと思い、即決した。ただし本物かどうか調査してからとなった。奈良の富本記念館に写真を送って問い合わせたり、資料を調べたり近代陶芸研究の知り合いにも見てもらった。これほどの掘り出し物にはそう出会えない。当の画廊関係以外で目にした最初の外部の人間だったのである。後で考えれば個人で買ってもいいくらいだった。惜しかった。でもやはりこれは前年度に「色絵粟田香炉」が入っていたから、それと既蔵の作品とがおまえも来いと初期の作品を呼び寄せたのだと思っている。ふっと座って目に飛び込んできたあの場面が忘れられない思い出になった。

ずいぶん長く書いてきた。そろそろ締め括りとは思うが、残りは15, 16, 17, そして今現在の18年度である。少々は書き急ぐことにしよう。

平成15年度

平成15年度は34件182点である。この年の大きなまとまりは3件。その一つは、昭和30年の美大日本画卒で日本画から版画家、現代美術へそして日本画へと展開している西真の作品である。前年度に長く勤めてきた嵯峨美術短期大学を定年で退任しているが、作家として評価していたこともありその時の記念展を見に行ってお願ひしたのである。西真を世に認めさせた現代美術の作品は当然のことながら他所に収まっていて無理だったが、版画や近年の日本画の代表

作を快く寄贈していただくことができて、ほんとうにうれしかった。二つめは染色の加藤正二郎の作品である。昭和42年美大卒で京都成安短期大学で教えていたが、任期途中58歳で他界した人である。新工芸展や京展で作品も見ているはずだが、しっかりと記憶に残っていなかった。その遺作展がギャラリーマロニエであって、いつもの画廊まわりの流れで会場に入った。作品を見て経歴を確かめて、その場にいた人に申し出た。その時は単なる実行委員の一人だったから話は進行しなかったが、本学の現役教員の先輩後輩になるから、そこから話はまとまった。型染めの工程が解る作品と型もいただいたから、資料にもなるし好い染色屏風を収集できている。戴くばかりというのが、本当は申し訳ないのである、卒業した母校だから、なんて言ったりしながら。でもこれといった作品や資料はどこかに残されていないといけないのである。その判断が問題だし評価の基準もあるようでない。それはしかし誰かがやらなければ何も残らないし作家の無念の情が中空をさまようことだろう。要はいいと思った、残したいと思えた、それだけである。それは最後は意味を持つはずと思っている。卒業作品がたくさん残されてきたしこれからも続く。過去の卒業作品がどれだけ現代で活用に足るものがあるだろうか。歴史的な資料性は高まっていくだろうが、それだけに終わる卒業作品も少なくはない。だがそれにしても、卒業作品の収集は必要不可欠なのである。そして、後年にその時期なり同期生を補う良質の作品が収集できれば、やがては他にないものすごい、しかも芸大芸術資料館にしかできないコレクションを作りあげることができるし、そうしなければならないし、そうすることが重要な仕事のひとつなのだと思ってきた。勿論、全然別の考え方も、多分正しい。

大きなまとまりの三つめは購入である。「何を」は毎年の悩みの種だが、この年は昭和45年4月から昭和62年3月まで本学で指導にあたっていた日本画の大野俣嵩の写生資料を考えた。絵専の卒業作品と退任の時に寄贈していただいた作品は所蔵していたが、写生類はなかった。大野俣嵩の生前から支援してきた画廊に少ない予算のまま打診する。懇意にしていた画廊の当主はご遺族の了解もとってくれて（本来なら売れば遺族に相応の入金になる預かりの形だった）、通常の商取引を度外視して手持ちの写生資料と小品ながら大野俣嵩の評価を国際的にしたドンゴロスによる抽象作品を提供してくれたことがうれしかった。この時はさらにご遺族の家に残っていた若い時期の写生資料（この類は売り物には成り難いが、資料的な価値はかえって高い）を寄付の形で加えていただくことができたから、この時も購入というより謝礼という実体になったのである。後日整理してみて、この若い時期の資料は画家の眼がどのような推移で変化していったかを跡づける貴重なものであると知った。

この時の退任寄贈は漆工の新海玉豊である。初期の飾り簀から抽象まで5点いただいた。他に珍しい寄贈では音楽の卒業生から家に伝わった呉春の三十六歌仙図屏風がある。部分的に損傷はあるものの鑑賞には耐えられるし呉春として間違いのない作品だった。まだ世に知られていないけれども、この作品も然るべき時には展覧会の檯舞台に出て話題になるだろうと思っている。

平成16年度

平成16年度は残念なことに購入予算がもらえなかった時だった。零では寄贈を期待しての交

渉もできない。全庁的に緊縮財政というが、三桁にならない予算を削ってどうなるものでもなかろうに仕方がない。それでも収集の機会があれば逃してはいけないのである。

前年に現代美術家の関根勢之助が急逝した。昭和42年4月から平成6年3月まで本学にあって構想設計という本学のユニークな専攻科を育てた人であり芸術資料館の初代館長を務めた人でもあった。或る年の春には、ご自宅の枝垂れ桜を鑑賞する大学職員10数人の懇親会を企画していただいたこともあったし、退任の時は、絵画や構想設計の作家らしい作品も残していただいていたのだが、関根勢之助らしい存分のオブジェ個展の印象をつい最近のように引きずってもいたから、それは思いもよらない訃報だった。遺作は、幸い長男と娘婿は活発に活動している現代美術家で旧知の二人だったが、レゾネを作る程に遺作の整理をきちんとした上で、美術館とかに作品を振り分ける相談も受けながら芸大への寄贈作品を選んでいった。何度か資料の確認をして、まだ収蔵していなかった初期の抽象「真夏の刻」からコンセプチュアルな「森の言葉」の作品、そして最後の個展に発表したオブジェ作品「朗読者」や「レクイエム」まで21点のまとまった数量を寄贈していただいた。これで先に収蔵された分と合わせて若い時代からの展開が収蔵品だけでも充分にたどることができるくらい芸大にふさわしい収集にすることができた。

この年はまた日本画の池田遙邨の貴重な水彩画40点の寄贈が遺族からあった。絵専卒業で昭和11年から24年まで絵専で指導にあたり、後に日本芸術院会員、文化勲章も受章した人の大正初め二十歳頃の作品である。ご遺族は、すでに156枚の関東大震災の素描も一緒に188点の同種の水彩画を京都国立近代美術館に寄贈しているし、縁の深い倉敷市立美術館にもまとまった数量が保存されているからまったくの新発見資料というわけではない。長男の日展日本画の池田道夫は父の画塾青塔社を主宰するようになっているが、その塾展を見に出かけて会場での立ち話から、また水彩画が出てきたから芸大にあげようかということになった。早速に伺って仕上りのいいサインや制作年のはっきりした40点を選んだのである。明治44年18歳のものがあつたりで、水彩画は京都市美術館には入っていないので、大変にうれしい寄贈であった。

それからさらに先年の川端弥之助の寄贈から話が生まれてでた昭和24年から40年まで油画の教員だった高林和作の作品とスケッチも新たに収蔵できた。それまで1点しかなかったからこれも有り難かった。ご遺族は梨木神社の向かいの瀟洒な家に父の作品を飾って一人住いだった。作品の先行きを案じながらいたところへ親しく交流のあった川端家の遺族に押されて決断したようだった。しかし作品と離れてしまうのを実に寂しいようにされていたから、本当はこの作品も欲しいのだけどという点数は次の機会にと家に残してきた。これで戦後の本学油画の雰囲気をつかめるように思えた。同じ年に木村嘉子という女性で最初にパンリアル美術協会に参加した現代美術家の寄贈が実現している。昭和30年に美大西洋画科卒業なのでまさに先の二人の教え子になる。この寄贈は前年の大阪現代美術センターでの小回顧展を見た時に始まっていて、卒業制作も含め作家としての展開が分かる数量に話はふくらみ、次年度へと二年がかりにもなった。京都国立近代美術館もほぼ同時に触手を伸ばしてきていたが、辛うじて一歩先に作品を選んで搬入したのだった。パンリアル展の作品などは時代的美術状況も知ることが出来る優れたものだし、そもそもパンリアル展は本学に縁が深い作家が集まった戦後京都ならではの美術

運動である。それを軸にした作品収集は遅きに失した感はあるが、出来得る限りの補完を心がける必要があると思っている。

そしてさらにまたこの年の寄贈はある。鈴木派の直系で日展日本画の人から再び鈴木百年、松年らの掛け軸4点が加えられた。すでにある作品、また購入で百年の粉本類がまとまって収蔵されているから着実に収集の実体は形成されてきている。先に書いてしまうなら、在任の最後である18年度の購入で縁あって鈴木百年の六曲一双の屏風を遂に収蔵できた。鈴木派コレクションのひとつの小さな山ができあがったのである。多分これは縁が縁を呼び縁から縁へとつながって、早晩に一回り大きく育つ収集となっていくことだろうと思える。それとこの年は異色の寄贈に丸屋大木平蔵の有職雛人形壇飾りがあったことも忘れられない。横幅と高さが2メートルを越す大飾りなので展示室での再現展示が出来なかったのは残念だが、すでに人形類の貴重な収集があってまた優品が加わった。博物館的色彩も濃い芸大芸術資料館ならではの収集となった。

平成17年度、18年度

さて次がようやくにして平成17年度である。この年の寄贈は退官になった日本画の山崎隆夫、平成16年に他界され京都二科会の重鎮として京都の洋画界に影響の強かった吉村勲がある。二人とも美術館時代から親しく作品に接してきた作家だから収蔵品に加える事が出来たのはうれしかった。ただ教授であった山崎隆夫は自然な流れとしても、吉村勲は卒業でもなく教育に関係したこともない作家だった。点数も16点と抽象表現の展開がたどれるにしても数多い。それは遺族が昔からの知人であったこともあるが、作品の評価も含め作家への個人的な思い入れが深かったからでもある。直接的に本学と関わりがなくとも、小牧源太郎の作品収蔵の例もあるし、京都の洋画の動向を見る時に必要な評価の高い作家の収集に消極的になってはいけない。収蔵して保存すれば活用する機会は少なくない。二科会で活躍する卒業生も多いのである。ただ手続きを二年度に分け、作品の価格評価を低めにして（遺族と相談した了解の上で）紺綬褒章をはずしたという事情はあった。他に、女性で初めてパンリアル美術協会の会員として活躍した木村嘉子の洋画、昭和27年卒業の洋画家市川正三の作品の寄贈もあった。

さらに平成18年度は、三輪晃勢、三輪晃久、入江西一郎たちの日展出品作日本画や三輪晃勢の力強い写生、元パンリアルの洋画家加藤明子、無所属の日本画家で卒業生の橋本明子の寄贈、京都画壇の巨匠竹内栖鳳の珍しい裸婦写生（明治43年作、東本願寺天井絵のための写生）の購入もあったのだが、紙数も尽きてきたので、ひとまず完とせざるを得ない。ただ、この年度内の手続きには間に合わなくて、整理上の都合で次年度以降になったのだが、昭和30年卒業で現在も活躍を続けている渋谷和子の染色作品や昭和5年の絵専卒業で京都から青龍社社人として活躍した琴塚英一の作品と写生資料の寄贈もあったし、やはり手続きは次年度になるが退官の竹内浩一、井俣慶人の寄贈もあったことを付記しておきたい。（完）